

## 小学校における教科担任制の新展開

### 第1節 小学校における教科担任制の意義

#### 1. 学級担任制の長短所

我が国の小学校では、一般に、「学級担任制」が採用されている。学級担任制とは、次のように定義される。

「1人の教師が1学級を担任し、各教科指導および生徒指導に責任をもつ教授組織の1形態。担任1人で教室の中でのすべての指導を取り仕切っていくことから、学級担任制は自足学級制self-contained classとも呼ばれている。学級担任制は、一般に小学校において採られている方式であり、教科担任制と対比される。学級担任制というのは、包括的に言えば1人の学級担任教師がほぼ全教科に関する学習指導と生活指導を行い、担任学級の経営を行う教授組織である。」<sup>(1)</sup>

このような学級担任制には、いくつかのメリットがある。まず、教師が教科指導を柔軟に繰り広げられる。例えば、国語・社会・図画工作の目標・内容を連結させて、地域の歴史に関する絵本を児童に作成させるといった合科的指導は、小学校ではごく日常的に実施されている。授業時間の弾力的運用も、小学校では珍しいことではない。算数の指導において、理解や習熟にもう少し時間がかかる児童が多いと判断したら、教師たちは、45分を超えても、学習活動を継続するであろう。そうした柔軟な指導はもちろん、教科指導と教科外指導(道徳、特別活動など)の統合にも及ぼう。小学校では、学級担任の裁量により、例えば音楽合唱会の開催時期に音楽の授業時間を増やすなど、学校行事と教科学習が密接に関連づけられている。

「ほぼ全教科に関する学習指導と生活指導を」担当すれば、当然、教師たちは、児童の様々な姿に接することになる。それは、彼らを様々な側面から理解し、評価することを教師たちに可能にしてくれる。ある教科の学習の成果がおもわしくなくても、別の教科の学

習においてよい成果を示す児童に接して、教師たちは、全体として彼らを肯定的に評価するだろう。それが児童と教師の人間関係の確立、児童に対するねばり強い指導の実現等に影響を与えることは、言うまでもない。

しかしながら、学級担任制も全能ではない。いくつかの問題点を抱えている。例えば、学級担任制は、教室を、いわゆる学級王国にしてしまう危険性を伴っている。完全な学級担任制の場合には、児童は、学校では1人の教師にしか接しないことになる。一般に、教師は、「重要な他者」として児童に対して多大なる影響力を持っている。それが学校生活のあらゆる場面に及ぶのだから、教科担任制に比べて、教室において教師が権威的な存在になりやすいことは誰にも目にも明らかであろう。

先に述べた「指導を柔軟に編成できる」という学級担任制の長所は、同時に短所にもなりうる。1人で全教科を、数多くの教科等を指導するためには、例えば授業の準備に、相当の労力を要する。教育目標・内容が安定している場合には、それでもまだ問題は小さくてすむ。けれども今日のように、教育課程の大綱化・弾力化が進み、また学習指導要領の改訂のペースが速まっている場合には、数多くの教科の指導を抱えているのは、教師にとって大きな負担となろう。特に、「どの子にも分かる喜びを」といった学力保障の徹底が望まれると、それはいっそう深刻なものとなる。

## 2. 小学校における教科担任制のあり方

学級担任制と対を成す概念が教科担任制である。これは、次のように、定義される。

「1人の教師が専門とする教科を担当することを原則として、各教師がそれぞれ特定の教科を分担し、教科指導に責任をもつという教授組織の1方式である。」<sup>(2)</sup>

言うまでもなく、教科担任制の特長は、前述した学級担任制の問題点を払拭できる点にある。例えば、限られた教科の指導に努力を傾注すればよいのであるから、授業づくりに関する教師たちの負担は(ある意味で)軽減される。

また、小学校の教師とて、神ではない。彼らにも指導するのに得意な分野とそうでない分野がある。特に現行の教員養成システムでは、小学校教員免許を得る課程に属している学生でも、卒業論文作成等の際にはある研究室に属し、1つの教科の内容・方法の研究に身を投じる場合が少なくない。現職教師に「あなたの専門は？」とたずねたら、「小学校教育一般です。」と回答する者は皆無であろう。教科担任制は、教員養成システムのそうした実態に整合しており、いわゆる「専門性」を児童に対する指導に生かすことができる。

さらに、筆者は、後述するように、小学校における教科担任制の可能性を、教師たちの「協同性」の向上に見出したいと考えている。換言すれば、小学校においては、中高等学校のように完全な教科担任制よりも、学級担任と「専科」教師やコーディネータとの広い意味での協力教授が組織しやすいし、また児童の学力・成長保障に効果的である。小学校

の学級担任制に教科担任制の持ち味・よさをいかにして組み入れるかという発想に基づき、以下、論を進める。

## 第2節 小学校における教科担任制の種類

図1は、筆者が描く、小学校における教科担任制の種類モデルである。小学校の教科担任制は、「負担の軽減」と「専門性の発揮」という2つの可能性を志向して、その導入が図られている。

さらに、実際には、中高等学校のように、1人の教師がある教科の指導について、その責任を全面的に負うというケースは希である。教科指導の部分的交換であったり、学級担任と「専科」教師やコーディネータとの協力教授であったりする場合が多いように思う。それらのすべてを、ここでは教科担任制と広く理解し、整理してみた。

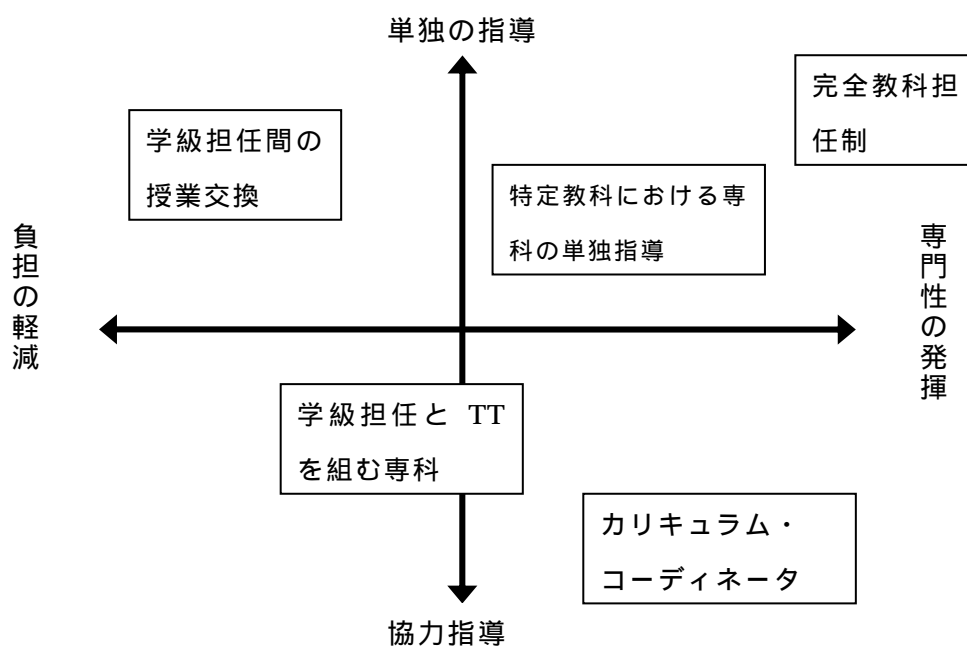


図1 小学校における教科担任制の分類

### 1. 完全教科担任制

1人の教師は1つの教科しか指導しない。それが、純粋な意味での教科担任制、完全教科担任制である。我が国の小学校では、教科担任制を徹底しているケースは極めて希である(「教科担任制」と呼称していても、後述する「授業交換」である場合が多い)。

前述したように、教科担任制には教師の専門性を生かせるというメリットがあることは

誰もが承知している。しかし、それでも小学校では純粹な教科担任制を避ける傾向にある。その理由を、前述した学級担任制の特長以外に、小学校教師たちの「学級経営」重視の姿勢に見出すことができよう。実際に、かつて筆者は、ある国立大学の教育学部附属小学校で、完全ではないものの、それに迫るような教科担任制を採用しているケースを目にした。国語の指導だけは学級担任がおこなうものとされていたので、その理由を同校の教師たちにたずねたところ、「学級経営の問題があるので」と、彼らは、回答したのであった。

なお、カナダのトロントの中学校において、筆者は、学級担任制と教科担任制の折衷的なシステムにふれたことがある。それは、1人の教師が、複数の教科の指導を担当するというものであった。<sup>(3)</sup>カナダの地理や歴史を調べ、それを作品(言葉、イラストなど)に表現するという地理、歴史、国語の合科的指導を1人の教師が展開していたのである。彼は、免許も地理、歴史、国語のものを有しているという。そして、合科的指導が、地理、歴史の学習にとっても、また国語の学習にとっても、効果的であると語っていた。彼の同僚には4教科の指導を担当する教師がいるとも聞いた。筆者が目にした複数教科担任制は、教師たちの負担を軽減することを意図して担当教科数を減らす授業交換とは、趣が異なる。複数教科の目標・内容の統合、それによる学際的な指導を目指した取り組みである。我が国の小学校の高学年において、このような複数教科担任制を採用する可能性も、今後検討されて然るべきであろう。

## 2. 特定教科における専科の単独指導

我が国の小学校においても、部分的には教科担任制が普及している。ただしそれは、これまでは、いくつかの教科に限られていた。最も一般的なのは、音楽における専科教師の指導であろう。次いで、理科、図画工作、家庭も、専科制が多く和学校に浸透している。

それらの教科の指導においては、他の教科の場合に比べて、教師にすぐれた「技能」が必要とされる。それは、衆目の一致するところであろう。それゆえ小学校では、典型的には、それらの教科の中学校教員免許も有している教師がそうしたポジションに就いていることが多いように思う。この傾向は、後述する「授業交換」の場合とは大きく異なる。

## 3. 学級担任間の授業交換

学級担任制を基本としつつ、そこに教科担任制の要素を加えるのが、この学級担任間の授業交換である。このシステムでも、各学級を担当する教師は多くの教科を指導する。しかし、いくつかの教科の指導を免れることができる。例えば、ピアノが演奏できないので音楽の指導に苦手意識を抱いている教師と、運動能力の低下により体育の指導に悩みを抱えている教師が、それらの教科の指導を互いに請け負う場合を意味している。

授業交換は、学級担任制のよさ、すなわち柔軟な授業づくり、子どものトータルな理解

等の特長を維持しながら、指導教科数の削減により、授業準備などの負担を軽減できるとに、その価値を認めることができる。より理想的には、先に述べた「専科」的な色合い、すなわち教師の得意分野を尊重できることが望まれよう。

しかしながら、ある教師が苦手とする教科の指導を別の教師が好むとは限らない。そう都合よく、指導が得意 - 不得意、好き - 嫌いというペアが成立するわけではなかろう。巡り合わせによっては、どちらかという指導を苦手としている教科を複数クラスで担当するケースさえあるようだ。しかしそれはそれで、自らの指導をていねいに省察する機会であると、生産的に状況を理解すればよい。本章に続く実践報告で紹介される事例の1つは、まさに、これに相当する。授業交換により、それ以前には指導をやや苦手としていた教科を不運にも担当することになった教師が、その不安を、励みに変え、教材研究や教材開発、さらには指導と評価の工夫への活力に転換していった例は、授業交換の積極的な意味を示唆している。

もちろん授業交換にも、問題がないわけではない。それは、「授業時数」のバランスに関するものである。例えば、第5学年の場合で考えてみよう。先に例示した音楽科の授業時数は50単位時間である。ところが体育科のそれは90単位時間であり、そこには40単位時間もの差が生じる。この2つの教科だけでは、授業交換は成立しない。

筆者と共同研究を展開している、ある女性教師は、2004年度、第5学年の学級担任をしているが、社会科の指導を同僚に譲り、その代わりに、音楽科と家庭科の一部の指導を担当している。それは、彼女が後者の教科の指導を得意とするからではない。授業時数を調整するためのやむを得ない措置なのだと聞いた。

#### 4. 学級担任とTTを組む専科

2とは異なり、(学級を担当せず)特定の教科の指導だけを担当するが、単独でその教科を指導するのではなく、広い意味での協力教授(以下、TT)を繰り広げる教師たちが、今、多くの学校に存在する。言うまでもなく、これは、教育行政のイニシアティブにより、強力に推進されているものである。例えば「教職員配置の在り方等に関する調査研究協力者会議」報告では、「基礎学力の向上を図り、学校でのきめ細かな指導を実現する観点からの学級の在り方の見直しとこれに対応する学級編制及び教職員配置」の必要性と可能性が唱えられた。<sup>(4)</sup>これにより、今、少人数指導などの実践が盛んになりつつある。

少人数指導の導入は、学級を分割して、通常の学級よりも小さいサイズの学習組織を編成し、そこできめ細かな指導を繰り広げることを、教師たちに期待するものである。その方針は単純分割、習熟度別、興味関心別など多岐にわたり、それゆえ少人数指導といっても、様々な姿をそこに見出すことができる。<sup>(5)</sup>

しかし、いずれの場合でも、学級担任以外の指導者が必要になる。誰が指導に加わるの

であろうか。現状では、少人数指導を実施する教科の「専科」教師が学級担任（たち）とチームを組むことが多い。つまり、学級担任制と教科担任制が組み合わされた教授組織が編成される。

これらの「専科」教師は、当該教科の指導を得意としているのであろうか。やはり2とは異なり、その教科の指導に長けているから、彼らが「専科」教師を務めているとは限らない。筆者はここ1、2年、少人数指導を実施している学校を数多く訪問したが、それらの学校で接した「専科」教師は、別の論理で組織化されていた。

それは、彼らのリーダーシップである。旧来、我が国の小学校で試みられてきたTTは、学級担任をT1とし、それを「補助する」教師がT2に位置づけられるものが、その大半を占めてきた。学級担任が一斉授業を進める傍らで、学級担任以外の教師が特別に支援が必要な子ども、学習遅進児等に対するケアをおこなうといった状況に、それは、代表される。

もちろん、1980年代に個別化・個性化教育が学校現場に浸透し始めてからは、小学校においても、学級担任とそれ以外の教師が理解や習熟の程度に応じた指導、学習スタイルや興味・関心別のコース選択学習などの編成に協力して取り組む姿が登場した。<sup>(6)(7)</sup>けれども、この場合にも、学級担任以外の教師が、指導と評価において、学級担任をリードする、イニシアティブを発揮するという向きにはなかったように思う。

ところが、現在、例えば学力向上フロンティア事業に着手する小学校において、フロンティアティーチャーと呼ばれる立場にある教師たちは、それは多くの場合に研究主任とか研究部長といったミドルリーダーであるが、「専科」教師として、複数の学年の指導について、その計画・実施・評価の先導役を果たしている。具体的には、彼らは、学級担任の意向やアイデアを吸収しつつも、どのような単元に少人数指導を採用するか、その際にいかなる方針で原学級を分割するのかといった基本構想を学級担任に対して提案する。また、分割後の学習プランを作成し、それをまかなうために複数の教材を開発する。さらには、ワークシートを開発したり、評価規準・判断基準を策定したりもする。それらの詳細については、本章に続く実践報告のもう1つの事例をご参照いただきたい。

## 5. カリキュラム・コーディネータ

4で述べた「学級担任とTTを組む専科」も、担当教科のプランを作成し、それに基づいて授業を実施・評価している。それは、カリキュラム開発の1側面に他ならない。<sup>(8)</sup>

そうした営みを拡充しようとするれば、小学校に、新しいタイプの教師が必要とされる。彼らは、カリキュラム開発に関わるリーダーシップを期待されて、学校で専科的な立場を占めており、カリキュラム・コーディネータとも呼べる役割を果たしている。その台頭は、総合的な学習の時間の創設が契機となった。

総合的な学習の時間の「ねらい」は学習指導要領に明示されているし、学習課題も例示

されてはいる。しかしそれらは、大枠に過ぎない。ことに、「ねらい」には多様な能力・資質が含まれているので、教師たちは、自校の子どもたちの実態や学校が置かれた条件を踏まえながら、それらの具体化に努めなければならない。<sup>(9)</sup>しかも2003年12月の学習指導要領の一部改正によって、「各学校において総合的な学習の時間の全体計画を作成する必要があること」が規定され、小学校では4学年に及ぶ目標・内容等の調整や関連づけが重要視されるようになった。<sup>(10)</sup>それは、簡単なことではない。現状では、ある学年の目標・内容等が充実していても、それらが別の学年でいたずらに繰り返されていたり、それらの目標・内容等を指導するための基礎経験が児童に不足していたりするという、全体計画が熟していないカリキュラムも数多い。

総合的な学習の時間の学校としての全体計画の確立に成功している学校には、カリキュラム開発上のリーダーが存在している。特に、いくつかの学校では、カリキュラム・コーディネータたる教師を、「総合専科」として教授組織に正式に位置づけている。彼らは、総合的な学習の時間の目標・内容等の整理、各学年の年間指導計画や単元プランの作成、教材やワークシートの開発、外部人材との連絡・調整、学級担任とのTTなどの役割を果たす教師たちである。

筆者は、2001~2002年度、岡山県のある小学校に設置された「総合専科」教師の役割や悩みを追跡した。<sup>(11)</sup>この女性教師は、第3学年から第6学年までの8名の教師と総合的な学習の時間のカリキュラムの開発・運用を共同的に展開した。彼女は、同僚の総合的な学習の時間の指導経験やそれに対する考え方の違いに配慮して、8名の教師たちに個別に働きかけ、総合的な学習の時間の学校としての全体計画の維持・発展に努めていた。同僚たちは、このカリキュラム・コーディネータを信頼し、彼女から、児童の前年度までの学習経験や他学年のカリキュラムの実際に関する情報を得て、総合的な学習の時間に関する学校としての全体計画を念頭に置き、その指導と評価にあたっていた。

総合的な学習の時間は、教育課程上は、教科ではない。したがって、現在のところ、我が国では、カリキュラム・コーディネータは、厳密には「教科担任制」とは異なる。しかし、英国の小学校では、各教科の指導と評価に責任を負うコーディネータを設けており、彼（女）は、担当する授業時数を減じてもらい、その代わりに、特定の教科のカリキュラムの具体的展開、すなわち教材の開発と管理、さらには研修について、リーダーシップを発揮することになるという。そして、そのイニシアティブが、刻々と変わる国定カリキュラムの枠組みを踏まえた指導と評価の成立、その充実には欠かせないと聞いた。彼の地の教授組織編成の工夫に学ぶとすれば、我が国に登場した「総合専科」教師は、教育課程の基準の大綱化・弾力化、カリキュラムの規制緩和時代に求められる、小学校における新しい教科担任制の萌芽を意味していると考えられよう。

### 第3節 小学校における教科担任制の課題

小学校における教科担任制は、先に述べたように、様々な可能性を秘めている。特に、学級担任制の長所を保持したまま、それを導入できる「学級担任間の授業交換」、「学級担任とTTを組む専科」、「カリキュラム・コーディネータ」は、教師たちの協同性を喚起し、学校改革を促す働きをも担うことになる。

しかしながら、それら含めて、小学校における教科担任制の導入と展開には、いくつかの克服すべき課題がある。本章のまとめに代えて、それを指摘しておきたい。まず、小学校で教科担任等に従事する教師全般にあてはまることであるが、彼らのアイデンティティの再構築をサポートする必要がある。小学校の教師たちの多くは、学級を担任し、自分のクラスの子どもたちとの関わりにできるだけ多くの時間を費やしたいと願っている。教科指導等と学級経営を統合して、自らのクラスを互いに高め合う学習集団に育てたいと望んでいる。教科担任制、あるいはそれと学級担任制との併用が効果的だと分かっているにもかかわらず、自ら進んで教科担任を申し出る教師は多くはなからう。実際、筆者が接してきた「専科」教師やカリキュラム・コーディネータは、教科担任制等の意義を認めつつも、「もし可能であれば、自分は学級担任をやりたい」と、皆、筆者に本音を語ってくれた。

良きにつけ悪しきにつけ、小学校では、学級担任制を基盤とする枠組みが敷かれている。学校行事等のスケジュールも、それを前提として、組まれている。教科担任等は、その流れに乗りやすく、学校におけるマイノリティになりやすい。その心の痛みは、決して小さくない。「学級事務を抱えなくてすむのだから、生徒指導の時間がいらぬのだから、彼らは、楽をしている」と考える教師もいるようだが、それは、大きな間違いである。

教科担任等が学級を単位とする営みにも適切に参画する仕組み、あるいは教科担任等のローテーションといった学校経営上の工夫を管理職は推進すべきであろう。さらには、教育行政が一定地域の教科担任等の交わり、具体的には共同での教材開発や合同研修を企画・運営し、彼らが所属校内で抱きがちな疎外感を緩和することも試みられて然るべきだ。

次いで、学級を担任しないということは、小学校の教師に、「自分の居場所がない」という感情をもたらす。理科等のように特別教室がある場合を除けば、例えば複数学年の教師たちとともに算数の少人数指導に勤しむ「専科」教師には、職員室以外に行くところがない。1人になって自らの実践を省察する環境が、彼らには、与えられていないのである。学校での教育実践は、企業や官庁の営みとは異なる。自らの実践を反省する機会と舞台が教師たちに与えられてこそ、彼らは創造的な営みに挑戦できるし、それを発展させられる。これもまた管理職の裁量に依るところが大きいのだが、教科担任等に、学校のいかなるス



ペースを提供できるかについて、知恵を絞るべきであろう。

加えて、「学級担任と TT を組む専科」やカリキュラム・コーディネータは、数多くの同僚と授業前後にアイデアや意見を交流しなければならない。ところが、その時間の捻出や調整は、至難の業である。総合的な学習の時間のカリキュラム・コーディネータの場合は、4つの学年団のミーティングに出席しなければならないが、それらを並行して催すことはもちろん不可能である。「専科」教師やカリキュラム・コーディネータと学級担任がアイデアや意見を日常的に交流できるインフラの確立、例えば校内サーバの構築や校内 LAN による情報交換の活性化などが、今後進められるべきだ。それらが充実すれば、上述したような時間不足や時間調整の問題は、多少なりとも低減するに違いない。

要するに、小学校では、学級担任制と教科担任制等がミックスされた教授組織の確立が理想とされるが、そのコラボレーションが実りをもたらすためには、後者に従事する教師たちが「孤立」しないような、彼らが小学校教師として自己実現できるような配慮とシステムが、学校に必要とされているのである。

## 注

(1) 日俣周二「学級担任制」．安彦他編『新版 現代学校教育大事典 1』ぎょうせい，2002年，p.423.

(2) 日俣周二「教科担任制」．安彦他編『新版 現代学校教育大事典 2』ぎょうせい，2002年，pp.348-349.

(3) 吉崎静夫・黒田卓「5章 カナダ編」．水越敏行監修『諸外国の特色ある教育方法』国立教育会館，1998年，pp.161-198.

(4) 文部科学省の審議会情報「今後の学級編制及び教職員配置について（報告）」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/012/toushin/000501.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/012/toushin/000501.htm))から。

(5) 香川大学教育学部附属坂出小学校『成功する少人数指導』明治図書，2003年。

(6) 加藤幸次『個別化教育入門』教育開発研究所，1982年。

(7) 水越敏行『個別化教育への新しい提案』明治図書，1988年。

(8) 安彦忠彦『カリキュラム開発で進める学校改革』明治図書，2003年。

(9) 木原俊行「総合学習のための授業システム改造」．片上宗二・木原俊行編『新しい学びをひらく総合学習』ミネルヴァ書房，2001年，pp.84-99.

(10) 文部科学省の Web ページ「小学校、中学校、高等学校等の学習指導要領の一部改正等について（概要）」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shuppan/sonota/03122606.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/03122606.htm))から。

(11) 木原俊行「カリキュラム・コーディネーターの抱える葛藤の特徴 - ある小学校の「総合的な学習の時間」専科教師を事例として - 」．日本教育工学会第 19 回大会講演論文集，2003年，pp.167-168.